

「負荷試験」

編集=小酒井 望
加藤 暎一
林 康之

東大教授

山 中 学

ある臓器の機能を知らうとする場合に、幾つかの検査を組み合わせたり、あるいはある種の負荷を与えてそれに対する反応性を観察したりする。とくに安静時には異常を認めなくても、負荷することにより、異常を見いだしうることも少なくない。この目的で行なわれる検査を負荷試験といっているが、これはまた臓器の予備能力を知る検査の1つともいえる。しかしこれら負荷試験はその目的、原理および反応機序を正しく理解しなければ、正しい結果は得られず、また得られた成績を正確に判定することはできない。

さらに負荷試験で忘れてならないことは、負荷そのものによる副作用の出現であり、また適応と禁忌の判断を誤れば、検査のために症状の悪化を招く場合すらあるということである。

本書は臨床検査のなかからとくに負荷試験のみをとりあげ、17名のそれぞれの分野における専門家により臓器別にまとめ、原理、方法、適応、副作用などを解説したものであ

る。

内容は、I 総論、II 肝臓（胆道を含む）、III 腎臓（泌尿器を含む）、IV 肺臓、V 循環器、VI 循環器系内分泌、VII 脾臓、VIII 甲状腺と上皮小体、IX 副腎（皮質・髄質）、X 脳下垂体機能検査法、XI 血液、骨髓、脾臓、XII 消化管、XIII 脳・神経系、XIV 生殖腺、XV 運動器の各部にわたっている。

本書を通読して気づいた点を述べてみる。まず原理、測定手技などは図解されており、たいへん理解しやすい。それに充実した内容、簡便な記述などの特徴がみられる。しかし一部には正常値を含めて説明のやや不足と思われる個所が、ないでもない。また特殊な試薬について、できれば国内での入手経路を述べてあると、実際に行なう者に便利であろう。私の専門からみて、ビタミンK負荷試験で、凝固時間も変動するとある点は気になった。これはプロトロンビン時間のみとすべきである。内分泌系で2、3の重複がみられ、試験名の統一を欠くものがあった。

参考文献は、検査別にまとめられ、さらに深い知識を得たいと思う者にとり便利である。一部で文献に欠いているが、これらは今後改訂の機会に、ぜひ書き加えていただきたいと思うのである。

日常検査のほか専門的な、どちらかといえば研究的ともいえる特殊検査も記載されており、臨床医家はもちろん、それぞれの分野での研究者にも一読の価値があると思われる。

負荷試験は、生化学的検査と生理学的検査とに大別されるが、前者は多くは医師により直接負荷が行なわれ、得られた検体は検査技師により測定される。また生理学的検査は医師の監督下に、多くは技師により行なわれるのが現状である。したがって医師はいうまでもなく、検査に従事する技師も、十分に負荷試験について内容を理解し、検査に習熟することが必要である。このことから検査技師諸君の本書の活用も期待される。（B5、360頁、図249、写真6、色図18、8,200円、〒200円、医学書院刊）